

対話として文章を読む 国語の授業

金本 宣保

国語の授業において、学習者が筆者との対話として文章を読むことを学ぶことを、ねらいとした実践である。河合隼雄「心の鉾脈」を教材とした授業で対話を学習の中心として進めた。作文「河合隼雄との対話」に、学習者の興味の深さが示されている。学習者は河合隼雄と対話することができた。現代文の授業は、結論を教えるのではなく、学習者が、文章を読み、それぞれ自分で考えていくことが基本である。それをより意識的にしていく試みの実践報告である。

はじめに

現代の文章は、対話する相手を想定して書かれているものが多い。どのような文章でも書くということは、読者を想定していると、言えるのであるが、例えば、文学者の孤独から発される言葉は、読者はその言葉を読み聞くという形になる。ここでは、作者が絶対的な者だ。ところが、現代の文章の多くは、筆者は読者と対話しようという姿勢で書かれている。そういう文章を国語の授業で教材として読むとき、学習者・生徒は筆者と対話する。対話をしながら読むことを、学ぶ。

1 大森荘蔵「見る一考える」（明治書院精選新国語Ⅰ現代文編）を教材とした授業

1997年度4年（高等学校1年）

大森荘蔵「見る一考える」の書き出し「幾何学で習った幅のない線とか広がりがない点とかいったもの、そういうものを目で見ることができるだろうか。ここで、できない、という答えは早過ぎよう。」第一文で、筆者が読者に問いかけ、読者が「できない」という答えだろうと想定し、それに対して、第二文でその「答えは早過ぎよう。」というのである。

授業では、第一文で、筆者が読者に問いかけていることを確認し、教室全体に「幾何学で習った幅のない線とか広がりがない点とかいったもの、そういうものを目で見ることができるだろうか。」とあるが、文章の後を読まないことにして考えて「できると思うか、できないと思うか」問い、挙手で答えさせる。「できない」と思う生徒が多かった。黒板にチョークで線を引き、「見えるじゃないか、なぜ、できないのか。」と問った。生徒の答えは「数学の先生に習ったような気がする。」ということであった。

1997年度の授業では、「できない」と思う生徒が多かったのであるが、1994年度の4年の授業では、ほとん

どの生徒が「できる」と思うであった。あるクラスの授業で、「できない」と思うに手を挙げた生徒の一人が考えをもっているようであったので、「なぜだ、皆に分かるように説明してください」と求めると、幾何学の線の定義から始めて丁寧に説明していった。「だから、できません」と論を結んだとき、教室の生徒皆が拍手をした。この教室の授業では、筆者の思考への高い関心を持続できた。

「できない」と思う生徒が多いようだが、そう答える根拠はあいまいである、知識として知っている。

大森荘蔵「見る一考える」を一読して難しいと思う生徒が多い。授業では、文章の難しさについて説明した。この文章は、「幾何学で習った幅のない線とか広がりがない点とかいったもの、そういうものを目で見ることが」「できない」というレベルの読者を想定している。それが、この文章が難しいということだ。相手が小学生なら、問が意味をなさないであろう。「できない」という答えを知っている読者に、知識としてではなく、その意味を改めて明かにすることで、「見る」とことと「考える」とこととの違いを明かにしようとしているのである。今まで算数・数学でかいていた線は、幾何学で定義された線ではなかったのだと驚いたものによく分かり、あれこれ分からないことがあると疑問をもっているものに面白い文章なのである。この文章が難しいとは、そういうことなのだ。この文章を学習することで、難しい文章を読む方法を学習するのだ。

「見る一考える」を教材とした授業では、対話の形で文章が展開されていることは学習した。板書において、論の構成をまとめるというより

読者 ～

筆者 ～

という対比を明かにするようにした。

しかし、文章が難しいので、学習者自身が筆者と対話

をする活動はを中心にした授業はできなかった。

2 河合隼雄「心の鉱脈」(明治書院精選現代文)を教材とした授業

1998年度5年(高等学校2年)

(1) 学習の展開

4年で「見る一考える」の授業をした学年を、続いて授業をすることになり、5年のはじめの授業が、河合隼雄「心の鉱脈」を教材としたものであった。

河合隼雄「心の鉱脈」は、もともと、読者と対話するふうに書かれている。それを、意識的に取り出すことを学習の中心にした。学習の展開は次の通りである。

第1時 第1段を指導者が「読者の意見」の形に書き換える(短い1文にまとめる)。

第2, 3, 4段を学習者が自分で読者の意見の形に書き換える。

第2時 第5, 6段の筆者の展開の仕方を読み取る。

(そこまでの「読者の意見」を受けて、そのまま繰り返すかのように述べて、第1段「心のエネルギー」は使用するとそれだけ疲れるという「意見」と逆の結論「片方でエネルギーを費やすことが、かえって他のほうに用いられるエネルギーの量も増加させる」に導いていることを読み取る。)

第7, 8, 9段を読者と筆者との対話として読み取る(文末の表現に注目する)。

第3時 文章の展開についてまとめる。

ユーモラスな表現を味わう。

河合隼雄の「心の処方箋」(新潮社1992年発行)から選んだ文章(「人の心などわかるはずがない」

「100%正しい忠告は まず役に立たない」

「善は微に入り細にわたって 行わねばならない」

「心配も苦しみも 楽しみのうち」

をプリントしたものを読む。

第4時 作文「河合隼雄との対話」を書く。(前時に読んだ「心の処方箋」からの文章の中で興味を感じるものを一つ選び、それについて書く。)

・1段 私 - 「 」

2段 河合 - 「 」

3段 私 - 「 」という展開で

3段以上の段落で、600字程度で書く。

・河合隼雄の文章を読む前(1段)と読んだ

後との違いを分かりやすく書く。

・本文を引用してもよい。

・文体は自由。

第5時 前時の作文を発表する。(この授業では、よく書けている作文を選んで読ませるのではなく、出席番号順に読ませた。)

河合隼雄「日本人の心のゆくえ第11回『異文化コミュニケーション』で起きること」(岩波書店「世界」1997年12月号)の一節をプリントしたものを読む。

(2) テストの問題

テストでは、読者と筆者との対話ということに焦点を当てた問題を作った。

5年1学期中間テスト(1998年5月28日実施)

「仕事など必要なことに使うのは仕方ないとして、不必要なことに、心のエネルギーを使わないようにする、となってくると、人間がなんとなく無愛想になってきて、生き方に潤いがなくなってくる。

(省略)

それでいて、それほど疲れているようではない。むしろ、人よりは元気そうである。

①このような人たちを見ていると、人間には生まれつき、心のエネルギーをたくさん持っている人と、少ない人とがあるのかな、と思わされる。いろいろな能力において、人間に差があるように、心のエネルギー量というのにも生まれつきの差があるのだろうか。

他との比較ではなくて、自分自身のことを考えてみよう。例えば、

(省略)

テニスの練習のために、以前よりも朝一時間早く起きているのに、仕事をさぼるところか、むしろ、仕事に対しても意欲的になっている、というときもあるだろう。(省略)

②もちろん、物事には限度ということがあるから、趣味に力を入れれば入れるほど、仕事もよくできる、などと簡単には言えないが、ともかく、エネルギーの消耗を片方で抑えると、片方で多くなる、というような単純計算が成立しないことは了解されるであろう。片方でエネルギーを費やすことが、かえって他のほうに用いられるエネルギーの量も増加させる、というようなことさえある。

(以下問題文省略)

問 傍線①「このような人たちを見ていると、～差が

あるのだろうか。」の段落は、読者と筆者との対話という点で文章の展開の上でどのような工夫がされているか。それぞれ二十字以内で箇条書きにして、二つ答えよ。

問 傍線②「もちろん、物事には限度ということがあるから、趣味に力を入れれば入れるほど、仕事もよくできる、などと簡単には言えない」の内容を読者と筆者との対話の形で書くとどうなるか。読者「～」、筆者「～」という形で書け。

傍線①について

[解答]

- 一 読者を、具体的な例で納得させる。
- 二 読者が自然に問う展開になっている。

[問の意図]

「具体的な例」と「問」（「疑問」）とが要点。

それまでの具体的な例をまとめて、対立するように見える例から疑問を感じ、自然に一つの方向へ導いていく展開になっていることを、確認する。

傍線②について

[解答]

読者「それなら、趣味に力を入れれば入れるほど、仕事もよくできるんですか。」

筆者「物事には限度ということがあるから、簡単に、そんなことが言えるわけではない」

[問の意図]

読者と筆者との対話で、1文が構成されていることを確認する。

(3) 生徒の作文 A組の場合

それぞれの文章を選んだ人数（全体は40名）

「人の心など わかるはずがない」 11名

「100%正しい忠告は まず役に立たない」

6名

「善は微に入り細にわたって行わねばならない」

10名

「心配も苦しみも 楽しみのうち」 13名

「人の心など わかるはずがない」を選んだ作文から
文例A 全文

私 - 「心理学者と話をすると、どうも自分の心を見すかされるようでいやだなあと思っていたんですよ。」

河合 - 「みんな、やっぱりそう言うねえ。だけど、私は人の心など分かるはずがないと思っているんだ。それに、人の心の動きを決めてかかるのは、責任

のがれのようなところがあっていやなんだ。だから、私は未来の可能性の方に注目して人に接することにしてるんだ。」

私 - 「僕は、河合さんのその未来の可能性という言葉が、とても好きです。なぜなら、悪いところを見るより、良いところをみるほうが、何倍も気持ちいいことだと思います。」

河合 - 「それだけでなく、そこから生じてくるものを、尊重することも大切なことなんだ。そうしているうちに、相手の心もだんだんわかってくるものなんだ。しかし、可能性に注目することは、ずいぶん心のエネルギーを必要とするんだ。」

私 - 「僕も、河合さんのように人の心の可能性、いいところを見つければ、そして、それを尊重することのできる人間になりたいものです。」

河合 - 「そのためには、まず先入観というものを捨てなくてはね。例えば、怖そうな顔をしているから、怖い人だとは、いちがいいには言えないだろう。その人の心を理解することから始めるべきだと思うよ。」

私 - 「はい、わかりました。ありがとうございました。」

河合 - 「いやいや、たいしたことじゃあないよ。」

指導者の評

楽しく河合隼雄と対話をしている。自分が、人と接するときの教訓を学んでいるが、他にもこうすべきなのだという事を書いている生徒は多かった。「心の処方箋」の文章の性格からくるものでもあるが、生徒が自身で納得して語っているところがよい。

結びの挨拶のやりとりも他にも書いている生徒は多く、ほほえましい。

「100%正しい忠告は まず役に立たない」を選んだ作文から

文例B 全文

他人A - 「とうとう5年になっちゃった。来年は受験だ。オレ、どうしても、マサセツチュー大学に入りたいんやけど、どうすりゃええかいな。」

私 - 「そりゃあ、勉強するしかないやろ。」

河合 - 「なにを、当たり前のことを。そういう100%正しい忠告ちゃうのは、役に立たん。」

私 - 「あんた誰？」

河合 - 「私か、私は、河合隼雄、70歳じゃ。生まれは、兵庫県。臨床心理学者でう。なんじゃ、おまえ私のことを知らのか。」

私 - 「授業で習いました。あなたが、あの河合さんですか。ところで、100%なんちゃらかんちゃらって、なんですか。」

河合 - 「うむ、ちょっと待てよ。そうじゃ、例を挙げよう。野球のコーチが打席に入る選手に『ヒットを打て』と言えば、これは100%正しいことだが、まず役に立つ忠告ではない。どうやって打つか、勝負球は、カーブが多いとか、そういうことの方が役に立つのじゃ。まあ、しかし、これも、いっつもいっつも当たらんからの。つまりじゃ、忠告する方は『その場の真実』しかないんじゃ。そして、それなりの責任をとらんとおう。」

私 - 「忠告に、責任を持ってないのなら、言うな、ということですか。」

河合 - 「フフフフ、それは、どうかの、ここで返事をすると、責任があるからのう。ま、そういうこともあると心に留めておくことじゃの。では、さらばじゃ。」

私 - 「消、消えた！なんか、結局よくわからなかったけど、なんとなくわかった気もする。うーん、どっちなんじゃ。」

指導者の評

全体が漫画のような展開になっている。指導者の示した型の「私」ではなく「他人A」ではじめ、河合隼雄が方言、備後方言か関西弁か不明な方言、で話しているなど、遊んでいる。生き生きとして、河合の言いたい要点をつかみ、態度を身につけようとしている。

「善は微に入り細に 行わねばならない」を選んだ作文から

文例C 全文

私 - 「ボランティアっていうのは最近大はやりですが、それと同時に、ボランティアをする人の態度も問題になってきましたね。例えば、ある主婦がボランティア好きで、よく近くの老人施設に通っている。けれども、彼女の家には介護の必要な義父がいる。義父の面倒はみたくないが、ボランティアはしたいのかしらというような話も聞きます。」

河合 - 「そうですね。その例は、ちょっと極端すぎるようですが、微に入り細にわたるような面倒なことはしたくない。ともかく善意でやっているのだから、という人は、それは自分が好きでやっているだけのことで、賞賛に値しないどころか近所迷惑なことをしているのだ、という自覚くらいは

もってほしい所ですね。」

私 - 「つまり、それは自己満足でしかないということですね。本当の善とは難しいものなのですね。」

河合 - 「自分では善と思っている、本当はどうかわからないと思えてくるようになれば、あの『善人』に共通する不愉快な傲慢さも消えてくると思います。」

私 - 「もっと自分の行為について考えてみなければなりませんね。」

指導者の評

はじめに皮肉な例をとりあげている。実際には、河合隼雄の文章を読んで、思い当たったことだろうが、作文としてはそれで書き出したほうが面白い。

「心配も苦しみも 楽しみのうち」を選んだ作文から
文例D 全文

私 - 「心配や苦しみがあれば、その次にはきっと、喜びや楽しさがくるんだ。だから、この壁も越えてみせる。私の今の考えはこうです。けれども、河合さんによると、心配も苦しみも、楽しみのうち、なんですね。」

河合 - 「もちろん、トラブルの渦中にあるときは、心配に打ちのめされたり、苦しみから逃れようとのたうちまわったりで、楽しみどころではありませんよ。けれども、そのような状況から抜け出した後で、振り返ってみると、『やっぱり楽しみのうちだったかな』と思えてきませんか。」

私 - 「そうですね。今の自分が、こうしてあるために、なくてはならないこと、成長の糧であったのだなあと感じることはあります。けれども、それを、楽しみとして受け入れることのできるキャパシティは持てない気がします。やっぱり、心配なときは心配だし、苦しいときは苦しいですから。」

河合 - 「きっと、経験を重ねてゆくうちに、心配や苦しみを、落ち着いて受け入れられるようになっていくと思いますよ。」

私 - 「落ち着いて受け入れられる—ですか。素直に心にしまい難い言葉ですね。今の自分を否定されてみたいで怖いんですから。子供なのかもしれないけれど、誰かに言われたら、自分が悲しくなりますね。エネルギー源となる何か大きなものを、壊されるとでもいうのかな。感情のやり場がなくなってしまふ。だって、それについて文句を言う

のは、わからずやだし、大人ぶって真似をしてみせるのも、疲れるだけだし。

相手に気づかれたくないですね。けれども、見透かされていることは間違いありません。（笑い）

指導者の評

河合隼雄の意図は理解しながらも、今の自分の生き方から違和感を感じている。目標に向かって進もうとして、心配や苦しみの中にいるので、「楽しみとして受け入れることのできるキャパシティは持てない」。「心配も苦しみも」他人のものとして見れば、「楽しみのうち」ということに納得できるのであろうが、自分のものであれば受け入れにくい。

ただし、この生徒も（笑い）で結んでいるように、自分を客観的に見ていて、余裕がないわけではない。

何人かの生徒が「心の処方箋」の他の文章を読みたいと、言ってきたので、学校の図書館にある本や指導者が持っていた本を貸し与えた。それらの生徒の中に、感想を書いてきたものがあった。

文例 E 全文

「人間理解は命がけの仕事である。

人間理解とはどんなことだろうと思った。どこまでわかれば理解したことになるのだろうか。河合さんは人の心などわかるはずがないと言った。わかると理解するとはどう違うのだろうか。ここでも人間理解というものはなかなかできないと言っているから同一のことかもしれない。

私の今までの人間理解が、どれだけ甘いものだったかわかる。つきはなされるのが怖くてわかったふりをしてきた。そんなことで人が心を開いてくれるはずもないのだと思う。その人を大切に思うのなら、命がけの理解をしようと思う。

理解についての答えはでないけれど、努力していくことで一歩ずつ近づいていくものだと思う。わかったと思って努力をやめると、その時点で理解していないことになる。だから、あきらめず、努力を続けていきたい。

灯を消す方がよく見えることがある。

人は灯に頼るものだと書いてあったけれど、わたしにとって灯とはなんだろうか。そして、それを消すことによって見つけなければならないこととはなんだろうか。授業がその一つだと思う。授業を黙って聞くことが大切だ。そうすれば、大学にも受かると考えている。でも、その灯を消して見ると、本当にしなければならないことが、だんだんわかってくる。受け身で聞くだけじゃあ

けない。自分で積極的にとりくむべきだ。このことは、よくいろんな人からいわれてきた。でも、今、初めて、真からわかった気がする。

この他にもたくさん灯を私がかかえて生きているだろう。その一つ一つを見直すことで、もっともっと自分を大きくしていきたい。

文句を言っているうちが華である。

こういうこともあるんだと思った。私は親に心配をかけてはいけないと、（文句を言われるのがいやということもある）相談しないことがある。うちの母親は祖母にたいしてなにも相談していない。でも、それでは、祖母がほけてしまうことになりかねないのだ。本当におかしなことだなと思う。

私の性格から内心で笑うことはなかなかできない。だから、文句をいわれると、ついむかついてしまう。だけど、文句を言うことで安定していられるのなら、それもいいかなと思う。」

指導者の評

全体を読もうとしたことがよい。真面目過ぎるほど真面目に受けとめている。そこが、いかにも高校生らしくてよい。

3 評価と発展

河合隼雄「心の鉦脈」、河合隼雄の他の文章を、対話として読む授業は、興味を持って学習できたのではない。特に、作文「河合隼雄との対話」は、生徒のそれぞれの書き方に工夫がみられて、面白いものになった。多くの生徒が河合隼雄と対話することができている。

河合隼雄は、現在、積極的にいわゆる社会的な問題に対して発言している。河合隼雄は、語りかけ、応えを求めている。結論を教訓として教えるのは、指導者も意欲がわからないだろうし、学習者に楽しいものにならないであろう。学習者が、筆者の話をきいて、それぞれ自分で自分の役に立つことをみつければよい。

1998年度5年2学期に夏目漱石「こころ」を教材とした授業をしたが、教科書を学習した後、国語科で準備してある岩波文庫「こころ」を読む時間をつくり、作文「先生への手紙」を書かせた。「こころ」は、作品の構成が対話なので、その課題は、自然なものであった。また、漱石の「現代日本の開化」を読み、その論が現在の日本に当てはまるかどうか、考えて書かせる学習もした。

さらに、国語の授業において対話という形を意識して発展させていくことはできそうである。

むすび

ある生徒が書いていた。

「河合－『専門家は、人の心がいかにわからないかということ、確信をもって知っているだけなんです。』

私－『ソクラテスのようですね。』河合－『どうかなあ。』」

他にも河合隼雄を「ソクラテスのようだ。」と書いた生徒がいた。ソクラテスの対話はプラトンによって著され、人々はそれを読み対話をしてきた。

兼好は「ひとり、灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。」（「徒然草」第十三段）といている。ここに読書の喜びは尽きるであろう。読書は対話であると昔から言われていた。須賀敦子は1998年に逝去したが、この年、須賀敦子の本がよく読まれた。「遠い朝の本たち」「本に読まれて」という本の題からもうかがえるが、須賀敦子は、本と語り合うことによって、生きることを豊かにしてきた。

生徒は、各自に応じて文章において対話してほしい。そういう場を国語の教室において体験させたい。できるなら、そういう態度を身につけて生きていってほしいものである。